

## JASMA 誌 ～変わるもの・変わらぬもの～

石川 正道

日本人の血というものに思いを馳せている。私たち日本人の祖先は、ホモ・サピエンスの歴史の中で、およそ 3 万年前にアジア大陸から海を隔てた日本列島に渡った。アフリカ大陸で進化したホモ・サピエンスは、世界各地に居住地を求めた。その移動の中で最も困難な移動は、種の持続を可能とする集団レベルでの海を越えた航海にあった。それを達成したのが私たち日本人であり、それはまさしく人類史的な偉業であるという、新学説の検証プロジェクトが進んでいる<sup>1)</sup>。

JASMA の活動は、日本人が全く経験することのなかった宇宙環境という未知の世界への探究心を支え続けた。JASMA は第 1 次材料実験（ふわっと'92）の PI 間の情報共有の場として発足した。その後、国際宇宙ステーション（ISS）の利用という新たなミッションが加わり、ISS の初期運用に向けたユーザーコミュニティを育成する役割を担った。私が宇宙環境利用の仕事始めたとき、それがどういうものなのか、皆目分からない中、なんのためらいもなくその世界に飛び込んだ。「人類活動の宇宙環境への拡大」という目標に、まさしく血が騒いだとしか説明しようがない。

私は、2007 (Vol. 24) ～ 2012 (Vol. 29) の 6 年間、編集委員長に任にあった。続く 4 年間 (2013 ～ 2016) は JASMA 会長として、足掛け 10 年に及ぶ学会運営に携わった。今振り返ると、編集委員長在任中の 2009 年からの数年間は、正しく JASMA にとってはターニングポイントであった。「きぼう」実験棟の初期運用が開始され、実験ミッション第 1 号である MEIS のフルサクセス、続く SCOF ミッションも大きな成果を挙げ、JASMA にとって最高の時を得たと言っても過言でない。

しかしながら、当時 2020 年に終了すると定められていた国際宇宙ステーション計画のその後は、私たちに大き

な影を落としていた。すなわち、「ポスト ISS」時代の到来に JASMA はどう備えるべきか、という不安である。四半世紀を越える JASMA の歴史は、私にとって大きな財産であると同時に、「ポスト ISS」に向けた継承にどのように取り組むか、その時以来、「変わるものの中の、変わらぬもの」という JASMA 運営の課題を意識するようになった。

編集委員長、会長の任にあった 10 年間の想いと得られた結論については、既に JASMA 誌に書き留めた<sup>2)</sup>。この論文は、私から JASMA へのエールである。

最後に、JASMA 編集委員会にお願いしたいことを述べて本稿を閉じる。

ISS の運用終了に伴って、JASMA のミッションは第 3 のステージに突入する。いよいよ人類活動を地球外、低軌道外に向ける“ジャンプ”のステージが始まる。この歴史的ベクトルは、次なる JASMA 活動の本命であり、“変わらぬもの”である。旧来の学術の枠に自らを閉じ込めることなく、学術進取の気概を持って学会誌編集に取組んでいただきたい。10 年後には、月周回ステーションの運用、月面上の宇宙環境利用科学の世界が待っているのだから。

## 参考文献

- 1) 海部陽介：3 万年前の航海 徹底再現プロジェクト、国立科学博物館 (2018)。
- 2) 石川正道：日本マイクロ重力応用学会誌, 34 (2) (2017) 340205。